

今、あなた方は悲しんでいる。
しかし、私は再びあなた方と会い、
あなた方は心から喜ぶことになる。
その喜びをあなた方から取り去る者はいない。(ヨハネ福音書16の22)

You are sad now, but I shall see you again,
and your hearts will be full of joy,
and that joy no one shall take from you.

この主イエスの言葉は、これから十字架にかけられて処刑される前に、弟子たちに語った言葉である。愛の神、そして全能の神は、真理の証人たるイエスを死んで滅びたままには決してなされない。必ず、復活させる、そして再び弟子たちと会うことになる。

この主イエスの言葉どおり、三日目には、復活したイエスに出会い、さらに後に弟子たちの祈りによって待ち望んでいたとき、時かなって復活のキリストは、聖なる霊として来たり、彼らは霊的なイエスに出会うことになった。

そして、そのときには大いなる喜びが与えられ、それは持続していく喜びであり、私たちのほうで背を向けないかぎり、その喜びは消え去ることがないと言われた。

たしかにその喜びは 個々の人々の心にも消えることのない喜びを与えてきた。

私たちの死のときには、イエスと同じように、御国へと引き上げられ、そして文字通りその喜びは永遠となり、いかなるものも取り去ることができないものとなる。

さらに、その喜びは 歴史の中にあっても過去2千年の間、この復活したイエス—聖霊を与えられることによる喜びは消えることなく、人々の魂を流れてきた。

現在、それぞれの人たちは、それぞれに悲しみや重荷を持っている。一見そのような重荷を持っていないように思われる人も、その家庭や心の内部を知らされるときに、深い悲しみや重荷を負って生きているのを知らされることはしばしばである。

主イエスは、神のまなざしをもってそうしたこの世における人間のことを、いかなる人間よりも洞察しておられた。

そして、最もよく知られた山上の教えのなかにおいて言われた。

…ああ、幸いだ、悲しむ者は。
その人たちは、(神によって) 慰められるからである。(マタイ福音書5の4)

今、深い悲しみや苦しみにある方々にあっても、この主イエスの約束を信じて、聖霊を求めていくときには、再び主との出会いが与えられ、暗い谷間を通ってきただけに、さらに深い喜びとして、誰も取り去ることのないものとして与えられる—そのことを、こうした聖書の言葉は語りかけている。

野草と樹木たら

ヨツバシオガマ、キンコウカ（金光花）

乳頭山（標高 1478 m）への道にて。（秋田県と岩手県境にある山） 2014. 7. 25撮影



乳頭山は、その南部にある秋田駒ヶ岳とともに古くから知られていた山ということで、登山口には、秘湯として有名だという乳頭温泉郷があります。しかし、そこからの登山口の標識もなく、付近をいろいろ探しても分からないので、温泉の受け付けにいた人に尋ねてようやくわかったので、これは人があまり行かない山だとわかりました。

予想どおり、そこから稜線に登って乳頭山への縦走路を歩き、登山口の温泉のところに帰るまでの数時間、結局 誰にも会わないという静かな山と植物たちのなかでの数時間でした。

乳頭山は奥深い山で、それだけにその静けさのなかで咲いていた高山植物たちの語りかけがいつそうはつきりと感じたものです。

ここにあげたヨツバシオガマは、四枚の切れ込みのある葉が、階段状に付いていて、その上に赤紫の花が咲いています。これは中部以北から北海道の高山の湿地に見られるもので、四国や近畿の山々では出会うことがなかった花です。（徳島の剣山には、シオガマギクの仲間としては、トモエシオガマやコシオガマなどがあります。）

そして周りに咲いている黄色の花もやはり中部以北や北海道の高山の湿地で見られる花で、星型の黄色い花が特徴的で、金色の光の花ということで、金光花と言われます。

花の形も葉の形や色合いもさまざまで、高山の風雪が厳しいところで、夏の短い間にこうした花々がそれぞれに個性を表し、創造主の無限の英知と美を見る者たちに語りかけているのを思います。

こうした実際に咲いている花や周囲の清い光景は、私たちの精神の世界へと広がっていくものです。

旧約聖書の預言者が啓示を受けて語ったように、神との深い結びつきが回復されたその暁には、かつては荒れ果てた状態であっても、神の民に、そして神に立ち返った一人一人の心のなかにこうした花のごときうるわしいものが咲くというのです。

…荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ、砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ。（イザヤ書35の1）

現実のさまざまな問題があるこの世の荒野にあって、私たちの心の内にもこうしたうるわしい花々、青い空、緑の草原が広がっていくようにと願っています。

（文・写真ともT. YOSHIMURA）